

# メタファー明示構文「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」に関する考察

## — 「鏡の海」と「ネットの海」を例に—

すみで よしき  
角出 凱紀

京都大学大学院

04241997sumide@gmail.com

**概要：**「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文が表す意味関係は非常に多様であることが良く知られている (e.g. 西山 2003) が、件の構文がしばしばメタファーを喚起する (e.g. 鏡の海、ネットの海、炎の海) ことはほとんど無視されてきた。そこで、本稿は、メタファー明示構文としての「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」の用法の分類、及び、Sullivan (2013, 2016) と同様に認知文法 (e.g. Langacker 1987, 2008) の枠組みに則り、当該構文の分析を行う。

**キーワード：**メタファー明示構文、自律性と依存性、構成素構造、認知文法

### 1 はじめに

「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」や「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」という形式が表す二つの名詞(句)の意味関係は非常に多様であり、西山(2003: 16-50)では少なくとも以下の五タイプが存在することが指摘されている。

- (1) a. タイプ A: NP<sub>1</sub> と関係 R を有する NP<sub>2</sub>  
例: 「太郎のパソコン」「洋子の電車」「公園の男の子」
- b. タイプ B: NP<sub>1</sub> である NP<sub>2</sub>  
例: 「ピアニストの政治家」「北海道出身の俳優」
- c. タイプ C: 時間領域 NP<sub>1</sub> における NP<sub>2</sub> の指示対象の断片の固定  
例: 「東京オリンピック当時の君」「大正末期の東京」
- d. タイプ D: 非飽和名詞(句) NP<sub>2</sub> とパラメーターの値 NP<sub>1</sub>  
例: 「この芝居の主演」「太郎の上司」「あの本の表紙」
- e. タイプ E: 行為名詞(句) NP<sub>2</sub> と項 NP<sub>1</sub>  
例: 「物理学の研究」「パスポートの紛失」「予算の削減」

しかし、このような字義通りの用法の陰に隠れて、非字義的な関係が介在する「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」も存在する。

- (2) a. 鏡の海<sup>1</sup>  
 b. ネットの海  
 c. 炎の海

(2a) は「鏡のように美しい海」を意味するメタファー表現であり、「海」が「鏡」に喩えられている。一方で、(2b) は「インターネット」を「海」に喩えるメタファー表現である。(2c) の関係は少々複雑であり、「炎が辺り一面に広がる様子」が「炎の海」と形容されている。鍋島 (2016: 262) は、このようなメタファーを喚起する構文を「メタファー明示構文」と呼んでいるが、その存在を指摘するに留まっておらず、分類や分析は全くなされていない。

以上を踏まえて、本稿は、メタファー明示構文としての「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」に複数のサブタイプが存在することを指摘し、各タイプの違いを分析することをその目的とする。本稿の構成は次の通りである。まず、2 節では先行研究を確認し、その問題点を指摘する。3 節では、分析に先立って「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」の分類を行い、本稿の分析対象を明確化する。続く 4 節では、分析に用いる道具立てとして認知文法における諸概念とメタファー理論との関わりを述べる。5 節では、前節で導入された道具立てを用いて「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」の分析を行う。6 節では、メタファー明示構文としての「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」と字義通りの「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」との関わりについての考察を述べる。本稿のまとめは 7 節で行う。

## 2 先行研究

本節では、「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」構文に関する先行研究として、尾谷 (1998) を確認し、その問題点を指摘する。もっとも、尾谷 (1998) が主な対象としているのは、本稿が呼ぶところの字義通りの「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」構文であるということに注意されたい。

### 2.1 尾谷 (1998)

尾谷 (1998) は、「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」を参照点構造 (reference-point construction) という観点から分析している。Langacker (1993: 5) によると、参照点構造とは概念化者 (conceptualizer: C) がターゲット (target: T) に注意を向けるにあたって、より認知的に際立ちの高い参照点 (reference point: R) を経由するというものである。この際、ターゲットは参照点によってアクセスが可能となる範囲である支配域 (dominion:

---

<sup>1</sup> <https://www.kagaminoumi.com/>

D)に属している必要がある。例えば、「父の本」では「父」を参照点として、ターゲットである「本」へと注意が向けられるという分析がなされている(図1a)。

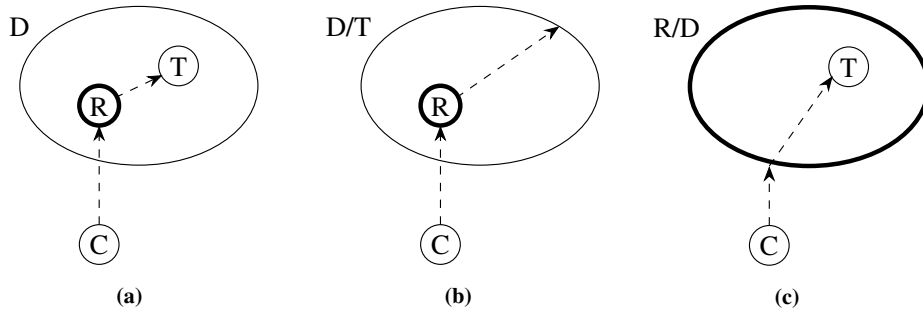


図1: 参照点構造の類型(尾谷 1998: 19 を一部改変)

もっとも、参照点がターゲットに含まれる(図1b)こともあれば、ターゲットが参照点に含まれる(図1c)こともある。「長髪の人」では参照点となっている「長髪」はターゲットである「人」と部分・全体関係を成していることから、参照点がターゲットに含まれているケースということになる。一方で、「父の手」ではターゲット「手」が参照点「父」に完全に含まれている。

## 2.2 先行研究の問題点

尾谷(1998)の分析は幅広い事例を一つの道具立てで説明できるという点において非常に魅力的ではあるが、本稿が対象とするメタファー明示構文としての「 $N_1$ の $N_2$ 」は上手く扱うことができないという問題がある。

そもそも、Langacker(1993: 6)が支配域を潜在的なターゲットの集合(the class of potential targets)と定義づけている以上、ターゲットである $N_2$ は参照点である $N_1$ の支配域に含まれていなければならない。例えば、「本」は「父」によって喚起される支配域に含まれているため、「父の本」という表現は問題なく容認される。

- (3) a. 父の本  
b.?父の火星

しかし、特殊な文脈を想定しない限り、「父」によって喚起される支配域に「火星」は含まれていない。比喩的に言えば、「父」と「火星」が同一の支配域に属すると言うには、両者の距離はあまりにもかけ離れている。これにより、「父の火星」は不自然と判断されるに至る。





$$(8) \text{ 鏡 } \left\{ \begin{array}{l} \text{の} \\ \text{みたいな} \\ \text{?という} \end{array} \right\} \text{海}$$

このことから示されるように、このタイプの「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」ではN<sub>1</sub>が喩辞となり、N<sub>2</sub>が被喩辞となっている。すなわち、N<sub>2</sub>がN<sub>1</sub>に喩えられているということになる。類例としては、「鬼の副長」「鉄の意志」「白魚の手」「ガラスのハート」「天使の歌声」「カモシカの脚」などが挙げられる。

### 3.2 ネットの海型

このタイプの「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」は「N<sub>1</sub>みたいなN<sub>2</sub>」という形式にはパラフレーズすることができないが、「N<sub>1</sub>というN<sub>2</sub>」にはパラフレーズすることが可能である。

$$(9) \text{ ネット } \left\{ \begin{array}{l} \text{の} \\ \text{?みたいな} \\ \text{という} \end{array} \right\} \text{海}$$

鍋島(2016: 261)によると、メタファー明示構文「N<sub>1</sub>というN<sub>2</sub>」は、N<sub>1</sub>のスロットに被喩辞が生起し、N<sub>2</sub>のスロットに喩辞が生起する。このことを踏まえると、このタイプの「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」も同様に、N<sub>1</sub>のスロットに被喩辞が生起し、N<sub>2</sub>のスロットに喩辞が生起すると特徴づけることが可能だろう。「ネットの海」の他には、「人生の旅」「都会のジャングル」「恋の病」などがこの類型に属する。

### 3.3 炎の海型

最後のタイプには、「N<sub>1</sub>みたいなN<sub>2</sub>」と「N<sub>1</sub>というN<sub>2</sub>」のいずれの形式にもパラフレーズすることができないものが含まれる。

$$(10) \text{ 炎 } \left\{ \begin{array}{l} \text{の} \\ \text{?みたいな} \\ \text{?という} \end{array} \right\} \text{海}$$

このタイプは、N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>がそれぞれ目標領域と根源領域に属するという点において、ネットの海型と類似している。しかしながら、既に紹介した二つの類型とは異なり、N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>の間にはいかなる直接的なメタファー関係も存在しない。つまり、「炎」が「海」に喩えられている訳でも、ましてその逆でもない。むしろ、<

炎が辺り一面に広がった状況>を「炎の海」と喩えているのである。N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>の間に直接的な関係がないことは、<キダ・タロー氏>を表すメタファー表現「浪花のモーツァルト」を考えることで一層明らかになる。この例でも、「浪花」が「モーツァルト」に喩えられている訳でもなければ、その逆でもない。「浪花のモーツァルト」というまとまりが<キダ・タロー氏>を喩えていることがわかる。したがって、ネットの海型と炎の海型は異なる類型に分類する必要がある<sup>3</sup>。

このように、炎の海型の「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」は全体として喩辞として働く<sup>4</sup>。ここで被喩辞をN<sub>3</sub>とすると、このタイプの「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」は(11)の構文の一部と考えることができるだろう (cf. 大田垣 2020: 93)。

(11) N<sub>3</sub>{は/が}まさにN<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>だ

(12) a. 辺り一面がまさに炎の海だった

b. キダ・タロー氏はまさに浪花のモーツァルトだ

このことはこの類型が英語のXYZ構文 (Turner 1987, 1991, Fauconnier and Turner 2002, Sullivan 2013) と非常に関係が深いことを示唆するが、本稿では議論の都合から考察の対象とはしない。

### 3.4 まとめ

以上のことをまとめたものが、表1である。ここで興味深いのは、鏡の海型とネットの海型の対立である。つまり、「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」という同一の形式をとっているにもかかわらず、喩辞と被喩辞の統語的な位置関係が反対になっている。

表1: 「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文

	メタファー関係		書き換えテスト	
	被喩辞	喩辞	N <sub>1</sub> みたいな N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> という N <sub>2</sub>
鏡の海型	N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub>	○	×
ネットの海型	N <sub>1</sub>	N <sub>2</sub>	×	○
炎の海型	N <sub>3</sub>	N <sub>1</sub> の N <sub>2</sub>	×	×

<sup>3</sup> なお、炎の海型を更に細分化する必要性も否定できない。

<sup>4</sup> 厳密にはN<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>がそれぞれ目標領域と根源領域という異なる領域に属するため、「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」を全体として喩辞と呼ぶことはあまり適切ではないが、暫定的にこの用語を採用している。

## 4 認知文法

具体的な分析を試みるにあたって、本稿では Sullivan (2013, 2016) に従い認知文法 (e.g. Langacker 1987, 2008) の枠組みを採用する。そこで、4 節では分析に直接的に関わる諸概念 (i.e. 自律性と依存性、構成素構造、メタファー理論との関わり) に話を絞って、簡単に確認をしておきたい。

### 4.1 自律性と依存性

認知文法における主要な概念の一つに自律性 (autonomy) と依存性 (dependence) があり、以下のように定義されている。

- (13) One structure, *D*, is dependent on the other, *A*, to the extent that *A* constitutes an elaboration of a salient substructure whithin *D*.

(Langacker 1987: 300)

ここで *near the door* という表現を例にとってみることにする。*near* がプロファイルしているのは、トラジェクター (trajector: tr) とランドマーク (landmark: lm) の位置関係であり、*the door* によってそのスキーマ的なランドマークが精緻化 (elaborate) されることによって、*near the door* という言語表現が実現している (図 2)。このことから (13) の定義に従うと、*near* は *the door* に比べて依存的であると結論づけられる。

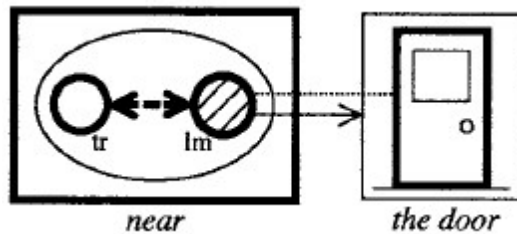


図 2: *near the door* の認知図式 (Langacker 2008: 201)

さらに、*a table near the door* を考えてみると、ここでは *near the door* のスキーマ的なトラジェクターが *a table* によって精緻化されていることから、*near the door* は *a table* に比べて依存的であるということになる (図 3)。



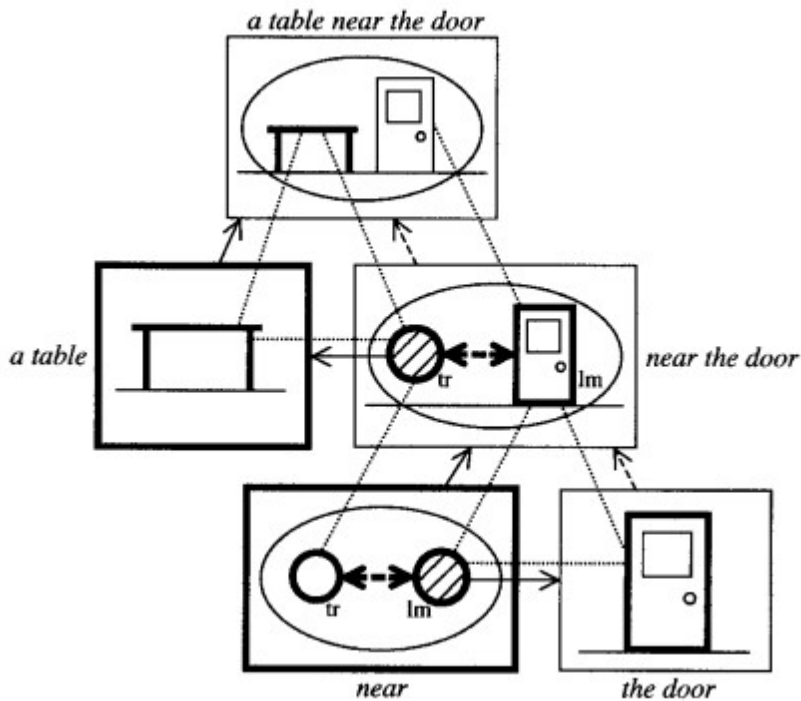


図 3: *a table near the door* の認知図式 (Langacker 2008: 203)

## 4.2 構成素構造

次に、認知文法における構成素構造 (constituency) の取り扱いについて見ておくことにする。認知文法では、構成素構造は「流動的で変化しうる (fluid and variable)」ものとされる (Langacker 1997: 3)。

例えば、*Jennifer likes that boy* という言語表現には少なくとも二種類の構成素構造が想定される<sup>5</sup>。一つ目は、まず *likes* と *that boy* が統合することによって *likes that boy* という合成構造が出現し、より高次のレベルにおいて *Jennifer* と *likes that boy* が統合されるというものである (図 4a)。

二つ目は、まず *Jennifer* と *likes* が統合することによって *Jennifer likes* という合成構造が出現し、より高次のレベルにおいて *Jennifer likes* と *that boy* が統合されるというものである (図 4b)。

<sup>5</sup> Langacker (2003: 69-70) では、更にもう一つの可能性があることが指摘されているが、本稿の議論には直接関係しないため詳細は割愛する。

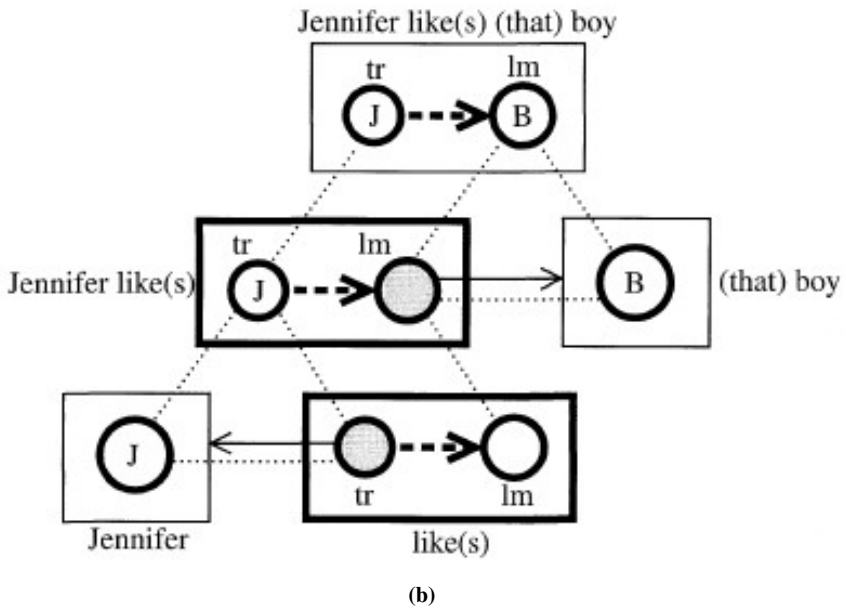
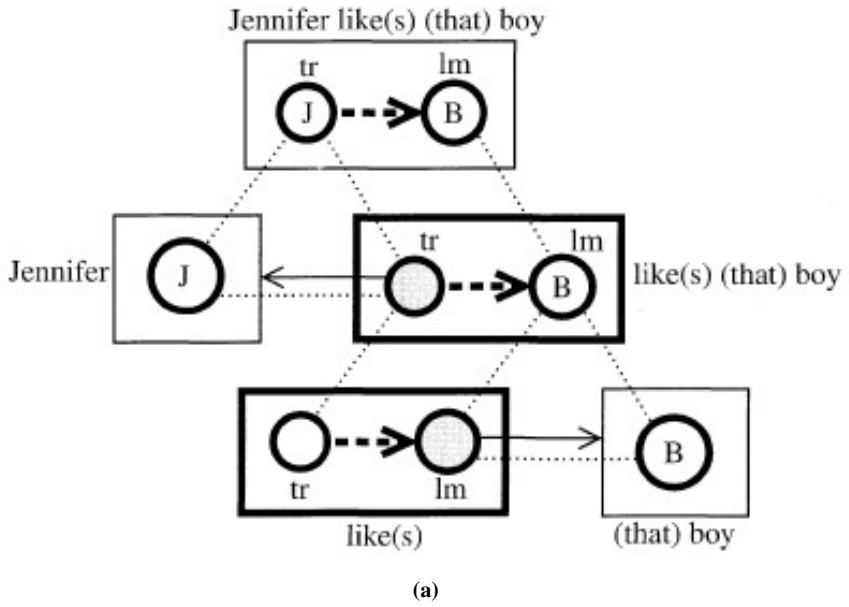


図 4: *Jennifer likes that boy* の認知図式 (Langacker 2003: 69-70)

### 4.3 メタファー理論との関わり

Sullivan (2013, 2016) は、認知文法の観点からメタファーの分析を行い、次のような制約を提唱している (cf. Croft 1993)。

#### (14) **Autonomy-Dependence Constraint**

In a metaphoric phrase or clause that can be understood out of context, every source-domain item must be conceptually dependent relative to at least one autonomous target-domain item.

(Sullivan 2013: 135)

例として単純な英語の他動詞構文 [Subj V Obj] を考えてみる。この構文では、動詞 V がプロファイルする関係におけるトラジェクターとランドマークをそれぞれ主語 Subj と目的語 Obj が精緻化することによって実現されるため、V が依存的であり、Subj と Obj が自律的であると分析される (図 5)。したがって、(14) の指摘

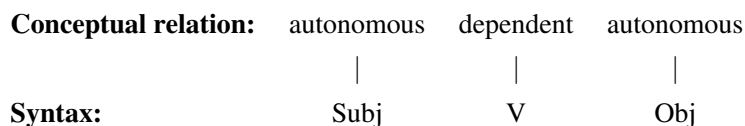


図 5: 他動詞構文 (Sullivan 2013: 93)

と照らし合わせると、何らかのメタファー解釈を要する [Subj V Obj] 構文では V が根源領域に属する要素であり、Subj または Obj が目標領域に属する要素であるということになる。実際、*The lawyer built an argument* といったメタファー表現を考えてみると、動詞 *built* は <THEORIES ARE BUILDINGS> というメタファーの根源領域に、目的語 *an argument* は目標領域にそれぞれ属していることがわかる (Sullivan 2016)。

単純な他動詞構文とは異なり、コピュラ構文では複数のレベルでの自律性と依存性が関係している (Sullivan 2013: 105)。彼女によると、[NP<sub>1</sub> *be* NP<sub>2</sub>] のようなコピュラ文では、まず *be* のランドマークが NP<sub>2</sub> によって精緻化されることによって、[*be* NP<sub>2</sub>] という依存的な合成構造が出現する。それから、この合成構造のトラジェクターを精緻化する形で NP<sub>1</sub> が統合される (図 6)。これにより、*Time is money* といったメタファー表現がそうであるように、[NP<sub>1</sub> *be* NP<sub>2</sub>] において NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> の要素がそれぞれ目標領域と根源領域に属しているということが (14) と矛盾しない形で説明される。

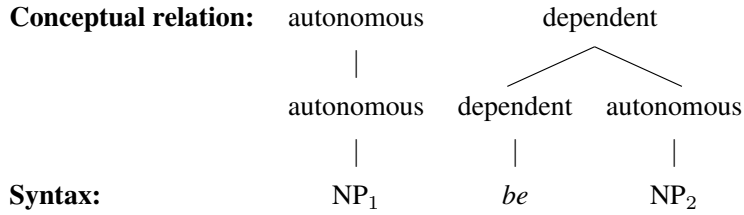


図 6: コピュラ構文 (Sullivan 2013: 106 を一部改変)

## 5 分析

5 節では、前節で導入した諸概念に基づいて、鏡の海型とネットの海型という二つのタイプの「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」構文の分析を試みる。メタファー明示構文「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」において、「の」がプロファイルするのは二つの参加者間の類似という関係性 (relationship) であり、N<sub>1</sub> と N<sub>2</sub> によってスキーマ的なランドマークとトラジェクターを精緻化することになる依存的な要素である (図 7)。そして、相対的に N<sub>1</sub> と

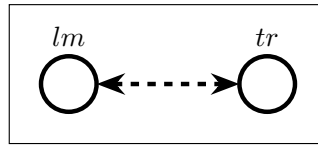


図 7: 「の」の認知図式

N<sub>2</sub> は自律的な要素であると想定される。ここから先の構成素構造に関しては少なくとも二つの可能性が想定できる。

一つ目の可能性は、最初に N<sub>1</sub> と「の」が統合することによって [N<sub>1</sub> の] という合成構造が出現して、最後に [N<sub>1</sub> の] と [N<sub>2</sub>] が統合することによって [[N<sub>1</sub> の][N<sub>2</sub>]] という構文が実現されるというものである (図 8)。なお、中間段階で出現する [N<sub>1</sub>

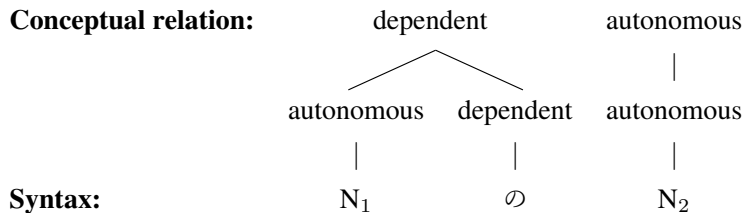


図 8: 「N<sub>1</sub> の N<sub>2</sub>」構文の第一の可能性

の]はN<sub>2</sub>によって精緻化されていることから、依存的であると考えられる。したがって、(14)の指摘と照らし合わせると、ここでは依存的な[N<sub>1</sub>の]は根源領域の要素となり、自律的な[N<sub>2</sub>]は目標領域の要素となることが予想される。そして、N<sub>2</sub>をN<sub>1</sub>で喩えるタイプである鏡の海型は、このタイプの構成素構造を有している必要がある。

二つ目は、まず「の」とN<sub>2</sub>が統合することによって[のN<sub>2</sub>]という合成構造が出現して、その次に[N<sub>1</sub>]と[のN<sub>2</sub>]が統合することによって[[N<sub>1</sub>][のN<sub>2</sub>]]という構文が実現されるというものである(図9)。ここでも先程と同様に、中間段階で出現する[のN<sub>2</sub>]はN<sub>1</sub>と比べて依存的である。このことから、自律的な[N<sub>1</sub>]は目

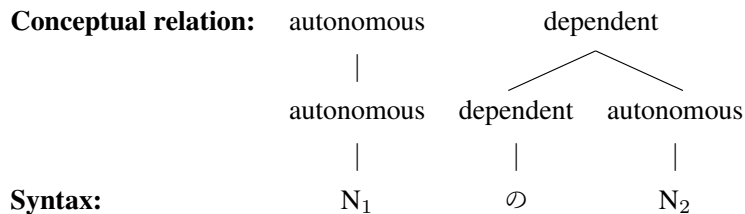


図9: 「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文の第二の可能性

標領域の要素となり、依存的な[のN<sub>2</sub>]は根源領域の要素となることが予想される。そして、N<sub>1</sub>をN<sub>2</sub>で喩えるタイプであるネットの海型は、こちらの分析を採用することになる。

このように、[N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>]構文が鏡の海型とネットの海型という一見相異なるタイプを持っていることは、両者の構成素構造の違いに還元される。

## 6 考察

本節では、本稿が扱う非字義的な解釈を要求する「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文と従来扱われてきた字義通りの「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文との関わりについて簡単な考察を述べる。

### 6.1 三宅(2010)との関わり

通常、合成構造のプロファイルはそのいずれかの成分構造のプロファイルを継承している。認知文法の枠組みでは、このような合成構造にプロファイルを譲り渡している成分構造はプロファイル決定子(profile determinant)と呼ばれ、これは伝統的に主要部(head)とされるものと大まかに一致する(Langacker 2008: 192-193)。

[[鏡の][海]]という合成構造がプロファイルするのは、紛れもなく海である。つ

まり、「鏡の海」とは海の種類を指し示すのであって、鏡の種類を指し示すのではない。この点において、[海]がプロファイル決定子、すなわち、主要部であると言える。一方で、[[ネット][の海]]という合成構造がプロファイルするのはインターネットであるとも、海であるとも言い切れない。というのも、「ネットの海」はインターネットの種類を表すわけでもなければ、ましてや海の種類を表すわけでもないからである。

三宅(2010)は、主要部の違いから「 $N_1$ の $N_2$ 」を(15)のように分類している。なお、冒頭で紹介した西山(2003)による五分類や尾谷(1998)の分析対象は主要部が $N_2$ であるという観点から全て主要部後置型に含まれる。

- (15) a. 主要部後置型:  $N_2$ が主要部となる  
 例:「太郎の電車」「かぼちゃの花」  
 b. 主要部同格型:  $N_1$ と $N_2$ のどちらが主要部となるか判断できない  
 例:「チューリップの花」「東京の町」  
 c. 主要部倒置型:  $N_1$ が主要部となる  
 例:「牛丼の大盛り」「カロラの1500cc」

そして、主要部後置型に属する「 $N_1$ の $N_2$ 」は $N_2$ の省略を許すが、主要部同格型は $N_2$ の省略を許さないという違いが指摘されている。

- (16) a.\*チューリップの花は好きだが、バラの $\phi$ は嫌いだ [主要部同格型]  
 b. かぼちゃの花は好きだが、大根の $\phi$ は嫌いだ [主要部後置型]  
 (三宅 2010: 83)

三宅(2010)による分類に従うと、 $N_2$ が主要部である鏡の海型は主要部後置型に、 $N_1$ と $N_2$ のどちらが主要部となるか判断できないネットの海型は主要部同格型にそれぞれ属すると判断される。実際、ネットの海型に属する「 $N_1$ の病」や「 $N_1$ の旅」では、(17)が示すように $N_2$ の省略が許されない。

- (17) a.\*ゲ-テは恋の病に悩んだが、国家の $\phi$ にも没頭した。  
 b.\*人生の旅は困難を伴うが、死出の $\phi$ は悲しみを伴う。

(大田垣 2020: 91)

一方で、鏡の海型に属する「 $N_1$ のハ-ト」や「 $N_1$ の歌声」では、 $N_2$ を省略しても少なくともある程度は容認される<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> (18)の容認度は筆者の内省による。

- (18) a. ガラスのφではなく、ダイヤモンドのハートを身に着けたい。  
 b. 彼女は天使のφというより、むしろ悪魔の歌声で有名である。

鏡の海型の「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」においてN<sub>2</sub>の省略が許されるのに対して、ネットの海型においてN<sub>2</sub>の省略が許されないという対立は、本稿が提案する構成素構造の違いを裏付ける一つの証拠となりうる。つまり、[[N<sub>1</sub>の][N<sub>2</sub>]]となる鏡の海型では、[N<sub>1</sub>の]が合成構造を成しているため[N<sub>2</sub>]の省略を許す。一方で、[[N<sub>1</sub>][のN<sub>2</sub>]]となるネットの海型では、[N<sub>1</sub>の]という合成構造が出現しないために、(17)のような文は容認されないということになる。

## 6.2 尾谷(1998)との関わり

次に、尾谷(1998)との関わりに話を移すことにする。本稿では分析に先立ち、「の」が二つの参加者の間の<類似性>という関係をプロファイルすると想定しているが、この想定は尾谷(1998)が提案する参照点モデルと相容れないものではない。

冒頭でも触れたように、「の」がプロファイルする二つの参加者間の関係は非常に多様であるが、その中の一つに空間における位置関係が考えられる。次の例文を参照されたい。

- (19) a. 机の書類を整理してもらえませんか。  
 b. 引き出しの書類を整理してもらえませんか。  
 c. カウンターの書類を整理してもらえませんか。

「机の書類」「引き出しの書類」「カウンターの書類」が典型的に指し示すのは、おそらく「机の上の書類」「引き出しの中の書類」「カウンターの下の書類」である。このことが示唆するのは、「の」がプロファイルするのはトラジェクターとランドマークの具体的な位置関係ではなく、単なる<空間における近接性>であるということである。そして、この<空間における近接性>を中心義に据えることによって、本稿が提案する<類似性>と尾谷(1998)が提案する参照点モデルは共存が可能となる。

Langacker(1993, 1995, 2009)によると、空間における位置関係を表す言語表現がメタファーの働きにより参照点モデルを喚起した結果として<所有>の意味を表すようになることがある。例えば、フランス語では英語の *at* や *to* に相当する前置詞 *à* によって<所有>の意味を表すことが可能である。

- (20) Ce livre est à moi.  
 this book COP LOC 1SG.OBL  
 ‘This book is mine.’

(Langacker 1995: 66)

空間と参照点モデルの対応関係は図 10 に示される通りである。空間における位置関係のうちランドマークが参照点モデルにおける参照点 R に、トラジェクターがターゲット T にそれぞれ対応する。このような空間メタファーの存在を想定す

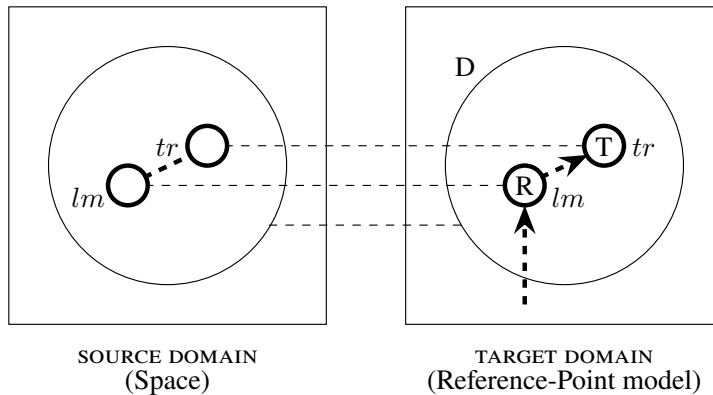


図 10: 空間と参照点モデルの対応関係 (Langacker 1995: 66)

ることで、「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文における<近接性>から参照点モデルへの拡張は問題なく説明される。

また、Grady (1997) はプライマリー・メタファーの一つとして<SIMILARITY IS PROXIMITY>の存在を指摘している (cf. 鍋島・中野 2017)。以下の例文では、本来物理的な距離を表すはずの言語表現 (i.e. *near*, *far from*, *close*) が類似性の尺度を表している。

- (21) a. Her hair is very *near* to his in color.  
 b. That's *far from* a perfect circle.  
 c. Not even *close*!

(Grady 1997: 130)

このプライマリー・メタファーを想定することにより、<近接性>を中心義にもつ「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文がメタファー明示構文として<類似性>を表すようになることが説明される。



このようにメタファー明示構文としての「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」と参照点モデルを喚起する構文としての「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」は、中心義である<空間における近接性>を表す「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」から異なる概念メタファーを通して拡張されたものであると位置付けられる。

### 6.3 まとめ

ここまでの考察を踏まえて、「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文をまとめたものが表2である。主要部後置型と主要部同格型の対立は構成素構造の違いに還元される。そして、主要部後置型は意味拡張の基盤となる概念メタファーの違いによって、「父の本」に代表される字義通りの用法と「鏡の海」に代表されるタイプのメタファー明示構文としての用法の二つに細分化される。一方で、主要部同格型では字義通りの用法と非字義的な用法の二つの存在が確認できるが、「チューリップの花」や「東京の町」といった字義的な用法における当該構文が表す意味関係については、更なる検討が必要である。

表2: 「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構文のまとめ

	構成素構造	意味関係	具体例
主要部後置型	[[N <sub>1</sub> の][N <sub>2</sub> ]]	参照点モデル <類似性>	父の本／長髪の人／父の手 鏡の海／白魚の手／ガラスのハート
主要部同格型	[[N <sub>1</sub> ][のN <sub>2</sub> ]]	??? <類似性>	チューリップの花／東京の町 ネットの海／人生の旅／恋の病

## 7 おわりに

本稿では、認知文法の枠組みからメタファー明示構文「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」を分析し、鏡の海型とネットの海型という相異なる解釈を要するサブタイプが構成素構造の違いによるものであるということを指摘した。しかしながら、両タイプの対立は喩辞と被喩辞の統語的な位置関係だけではない。

最大の違いとして、鏡の海型とネットの海型では喚起されるメタファーの種類が大きく異なるということが挙げられる。Gentner (1988) はメタファーを属性メタファー (attributive metaphor) と関係メタファー (relational metaphor) に分類してい

る<sup>7</sup>。(22a)の *a marshmallow* と *a cloud* の間に存在する主な類似性は白さという属性であるが、(22b)の *a tape recorder* と *a camera* には何か (e.g. 音声・画像) を記録するという関係が類似性として存在する。

- (22) a. A cloud is like a marshmallow. [属性メタファー]  
 b. A camera is like a tape recorder. [関係メタファー]  
 (Gentner 1988: 50)

このうち鏡の海型が喚起するメタファーは専ら属性メタファーであり、ネットの海型が喚起するメタファーは関係メタファーを喚起することが多い。具体的には、「鏡」と「海」の類似性は美しさや澄んでいるという属性であるが、「インターネット」と「海」の類似性はより複雑な関係と呼ぶべきものである (cf. Jamet 2010)。

この点に関して何らかの理論的な説明を与えることは今後の課題としたい。

---

<sup>7</sup> なお、両者の区分は段階的なものである (e.g. Gentner and Clement 1988)。

## 参考文献

- Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335–370.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Gentner, Dedre. 1988. Metaphor as Structure Mapping: The Relational Shift. *Child Development* 59(1): 47–59.
- Gentner, Dedre and Catherine Clement. 1988. Evidence for relational selectivity in the interpretation of analogy and metaphor. *Psychology of Learning and Motivation* 22: 307–358.
- Grady, Joseph E. 1997. Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Jamet, Denis L. 2010. What do Internet metaphors reveal about the perception of the Internet. *Metaphorik. de* 18(2): 17–32.
- Kövecses, Zoltán and Günter Radden. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9(1): 37–78.
- Lakoff, George. 1993. The contemporary theory of metaphor. In Ortony, Andrew (ed.), *Metaphor and Thought*. 202–251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1–38.
- Langacker, Ronald W. 1995. Possession and possessive constructions. In Taylor, John R. and Robert E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*. 51–79. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1997. Constituency, dependency, and conceptual grouping. *Cognitive Linguistics* 8(1): 1–32.
- Langacker, Ronald W. 2003. Constructions in cognitive grammar. *English Linguistics* 20(1): 41–83.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. Possession, location, and existence. In Langacker, Ronald W. (ed.), *Investigations in Cognitive Grammar*. 81–108. Berlin: Mouton de Gruyter.

- 三宅知宏. 2010. 『日本語研究のインターフェイス』 東京: くろしお出版.
- 鍋島弘治朗. 2016. 『メタファーと身体性』 東京: ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗・中野阿佐子. 2017. 「シミリとメタファーの境界—シミリを導入する表現の分類に関する一考察—」『KLS37: Proceedings of the Forty-first Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society』 37: 121–132.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京: ひつじ書房.
- 尾谷昌則. 1998. 「格助詞「の」の認知プロセス—彼女の飼っている猫は茜です—」『言語科学論集』 4: 11–27.
- 大田垣仁. 2020. 「比喩が介在した"N1 の N2"型名詞句について」『語文』 115: 82–102.
- Sullivan, Karen. 2013. *Frames and Constructions in Metaphoric Language*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sullivan, Karen. 2016. Integrating constructional semantics and conceptual metaphor. *Constructions and Frames* 8(2): 141–165.
- Turner, Mark. 1987. *Death Is the Mother of Beauty: Mind, Metaphor, Criticism*. Chicago: University of Chicago Press.
- Turner, Mark. 1991. *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*. Princeton: Princeton University Press.

## On a Metaphor Signaling Device “N<sub>1</sub>-no-N<sub>2</sub>” in Japanese: A Case Study of *kagami-no-umi* and *netto-no-umi*

Yoshiki Sumide

It is well known that an “N<sub>1</sub>-no-N<sub>2</sub>” construction can be interpreted in various ways according to which items occur within the construction in question (e.g. Nishiyama 2003). For example, *chichi-no-hon* (“father’s book”) represents the ownership, or the book owned by the father. This construction can also serve as a metaphor signaling device, which has not received much attention though. For instance, in a metaphoric phrase *kagami-no-umi* (“an ocean which looks like a mirror”), *umi* (“an ocean”) is compared to *kagami* (“a mirror”). In *netto-no-umi* (“the Internet, which is like the ocean”), on the other hand, *netto* (“the Internet”) is compared to *umi* (“the ocean”).

The aim of this paper is to classify the usage of a metaphor signaling device “N<sub>1</sub>-no-N<sub>2</sub>,” and attempt an analysis of it based on the framework of Cognitive Grammar (e.g. Langacker 1987, 2008) in accordance with Sullivan (2013, 2016). As a result, this paper points out that there are at least two subtypes of metaphor signaling devices “N<sub>1</sub>-no-N<sub>2</sub>” in Japanese, and that they differ in their constituencies, which leads to the distinct syntactic arrangements of a tenor and a vehicle.